



## Osaka Gakuin University Repository

Title	スポーツボランティア組織に参加する動機づけ要因の検証～コンサドーレ札幌のボランティア組織のアンケート調査より～ Verification of motivation factors from belonging to sport volunteer organization – Canvass by using a questionnaire in sport volunteer of Consadole Sapporo –
Author(s)	松野 光範・佐野 薫・酒井 博章 (Mitsunori Matsuno・Kaoru Sano・Hiroaki Sakai)
Citation	大阪学院大学 経済論集 (THE OSAKA GAKUIN REVIEW OF ECONOMICS), 第 26 巻第 2 号 : 135-154
Issue Date	2012.12.31
Resource Type	ARTICLE/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

## スポーツボランティア組織に参加する動機づけ要因の検証 ～コンサドーレ札幌のボランティア組織のアンケート調査より～<sup>1)</sup>

松野 光 範  
佐野 薫  
酒井 博 章

### 要 旨

本論文ではスポーツボランティア組織への参加の動機づけ要因を検証するために、コンサドーレ札幌スポーツボランティア組織（以下、CVS）でアンケート調査を実施し、分析した。分析の結果、CVSに所属する男性は、CVSを触れ合いの場として求めていることが分かった。また、コンサドーレ札幌のサポーターとして自発的にチームに貢献したいという意欲からボランティア組織に所属している面もあることが分かった。一方、女性が所属するのは、コンサドーレ札幌のサポーター（ファン）であることが大きな要因となっており、CVSを通してコンサドーレ札幌を支援したいというチームへの貢献意欲がボランティア組織への参加の強い要因であることが分かった。

キーワード：スポーツ、ボランティア組織、共同体感覚、動機づけ要因

JEL分類番号：I39; D19.

- 
- 1) 本論文の調査にあたっては北海道フットボールクラブ（コンサドーレ札幌の運営会社）林次長およびCVSのボランティアの皆さんにご協力を頂いた。また執筆に際して、森田忠士講師（大阪学院大学）から生産的なコメントを数多く頂いた。記して感謝の意を表したい。なお本論文にありうる誤謬については言うまでもなく筆者の責に帰すべきものである。

## 1. はじめに

不景気の中、スポーツ振興のためにはスポーツボランティア組織が大きな役割を担っている。プロチームといえどもスポンサーやチケット等による収益のみで利益を出し続けて存続していくことは難しく、チームを支えるスポーツボランティア組織の存在は欠かせない。

ボランティア組織への参加者は、基本的にやる気に満ちており、動機づけが高い。しかし、人間の自発的なやる気や動機づけが長期的に維持・存続することはない。もし、ボランティア参加者の自発的なやる気や動機づけが失われるならば、ボランティア組織が地域や社会に貢献できないばかりか、その存続まで危ぶまれる。従って、適切なインセンティブを与えることでボランティア参加者の動機づけを維持することが重要である。

インセンティブは奨励・刺激・報奨を指す。会社組織は賃金インセンティブを基本とするが、ボランティア組織は賃金インセンティブを活用できない。むしろ賃金のような報酬を一度与えてしまうと、かえって参加者の自発的な動機づけが損なわれる危険性がある。従って、自発的な動機づけを維持・存続するための適切なインセンティブ付与が必要である。しかしそのためには、現在ボランティア組織で働く成員からその動機づけ要因を探り、その成員に適した方策をすることが望ましい。

そこで本論文では、アンケート調査を実施し、得られた調査結果から回帰分析を行い、スポーツボランティア組織参加への動機づけ要因を探っている。さらに参加者の動機づけを維持するための適切な方策を提案している。

本論文の構成は以下の通りである。まず第2章では動機づけ理論について概観する。第3章ではスポーツボランティア組織の役割、そしてその具体的な組織事例の1つとしてCVSについて説明する。第4章ではアンケート方法とアンケート回答者の特徴を整理したのち、CVSに所属する動機づけ要因を回帰

分析により検証している。最後に第5章では、まとめと動機づけ維持のための方策提案、そして今後の課題を記述している。

## 2. 動機づけ理論

経営学の動機づけ研究は、動機づけ内容理論と動機づけ過程理論<sup>2)</sup>の2つに分類できる。動機づけ内容理論は「どのような動機に基づいて行動するか、すなわち、行動を引き起こす動機づけ要因は何か」というものである。代表的な研究は、Maslow (1954)による欲求階層説やAlderfer (1972)によるERG理論などである。

Maslow (1954)は、人間の欲求が①生理的欲求、②安全的欲求、③愛情的欲求、④尊厳的欲求、⑤自己実現的欲求の5つの階層として構成されることを主張した。最下層は生理的欲求で、最上層は自己実現的欲求である。そしてMaslowは、人間は最下層の欲求から認識していき、その欲求が満たされるとすぐ上の層の欲求が認識されるようになることを主張した。

Alderfer (1972)はMaslowの欲求階層説を修正して、人間の欲求がExistence（生存欲求）、Relatedness（関係欲求）、Growth（成長欲求）で構成されることを主張した。そしてMaslowと特に異なる点であるが、これらの欲求が階層の順に表出するものではないこと、さらには同時に表出することを主張した。

これらの生存欲求、関係欲求、成長欲求の充足は一般的に会社組織に所属したり、家庭を築くことで充足されると考えられる。しかし、会社組織や近隣での人間関係が悪い場合、関係欲求を充足するために、例えばボランティア組織に所属することも考えられる。

---

2) 動機づけ過程理論は「どのようなメカニズム、またはプロセスで動機づけられるか」というものである。この理論は、昇給や昇進等の賃金インセンティブとの関連が強いため、ボランティア組織への動機づけには適用が困難である。

Herzberg et al (1959)は動機づけの二要因説を主張した。一つは、衛星要因 (hygiene factors) であり、なければ不満になるが、あったとしても満足を感じるものではない。この衛星要因は外発的動機づけ要因である。外発的動機づけは、報酬等の経済的な見返りや、厳罰、昇格など「働く者の外部から働く者に与えられる動機づけ要因」である。そしてもう一つは、動機づけ要因 (motivators) であり、なくても特に不満を感じないが、一度経験するとさらに強い満足を求めてしまうものである。この動機づけ要因は内発的動機づけ要因でもある。内発的動機づけは、責任感や達成感、使命感など「働く者の内部から沸き起こり、やる気を引き出す動機づけ要因」である。

Adler (1964)は、人間は本来他者に対する劣等感を持っていると指摘し、その劣等感の克服には共同体感覚 (Gemeinschaftsgefühl) の発達が重要であるとしている。野田(1989)によると共同体感覚とは、所属感と基本的信頼感と貢献感の3つの感覚によって構成されると解釈されている。まず所属感とは「私は共同体の一員である」である。続いて基本的信頼感とは「共同体は私のために役立っているので、そこに所属する人々は信頼できる」である。最後に貢献感とは「私は共同体の人々の役に立っている」である。

ボランティア組織における外発的動機づけは、組織内での人間関係構築を促進させることで関係欲求を充足させることであると考えられる。共同体感覚の観点から言えば、所属感と基本的信頼感を充足することであると考えられる。一方、内発的動機づけは、その組織成員の働きぶりを労いあったり、承認しあったりすることで貢献感をさらに高め合うことであると考えられる。

### 3. スポーツボランティア組織

本章では、スポーツボランティア組織の役割について触れたのち、アンケート対象である CVS について説明する。

### 3.1 スポーツボランティア組織とは

海外ではスポーツボランティアが支えるスポーツとして定着し、スポーツの地位や価値を高めることにつながっている。このことは、スポーツが文化として生活の中に定着していることを示すものでもある。

日本と諸外国のデータを比較すると、過去1年間のボランティアの参加率は日本人25.3%、アメリカ人55.5%、イギリス人48.0%とその差が大きいこと、その中でスポーツボランティアは2000年8.3%であるとされている<sup>3)</sup>。日本においてもJリーグの発足以降スポーツボランティアが定着し、長野オリンピックに32,579人もものボランティアに支えられたと言う。長野県では大会の数年前よりボランティアを組織するとともに、ボランティアコーディネーターをおき1995年の阪神淡路大震災の際には、バスで被災地にボランティアを派遣した<sup>4)</sup>。

なおスポーツボランティアの役割については、表1のようにスポーツクラブや団体の運営を支えるものと、イベント・ボランティアに分けられる。Jリーグにおけるボランティア活動については、高橋がその業務内容を例示している。

表1 スポーツボランティア組織の役割

		ボランティア指導者	監督・コーチ、指導アシスタント
クラブ・団体 ボランティア	クラブ・スポーツ団体 【日常的・定期的活動】	運営 ボランティア	クラブ役員・監事、世話係、 運搬・運転、広報・データ処理、 競技団体役員など
イベント・ ボランティア	地域スポーツ大会、国際・ 全国スポーツ大会 【非日常的・不定期的活動】	専門 ボランティア	審判、通訳、医療救護、大会 役員、データ処理など
		一般 ボランティア	給水・給食、案内・受付、記録・ 掲示、交通整理、運搬・ 運転、ホストファミリーなど

出展：『スポーツ白書2010』（笹川スポーツ財団）p.99を筆者改編

3) スポーツ白書2010笹川スポーツ財団のpp.99-100に詳細に掲載されている。

4) 2010年8月21日当時ボランティアコーディネーターを務めていた、丸田藤子（現在、街中にぎわい研究所主宰）氏へのインタビューによる。

それによると競技場の場外警備から競技の運営にかかわるものなど幅広い業務を行っていることが判る。なおコンサドーレ札幌においては、ボランティアにチケット販売やグッズ販売による金銭的な責任や外周警備など事故発生の危険のある業務は行わせないという配慮をしている。

### 3.2 コンサドーレ札幌のボランティア組織

スポーツボランティアの参加率は女性より男性が多く、年代では30歳代、40歳代、50歳代と中年層が中心である<sup>5)</sup>。これに対しCVSは女性比率がほぼ50%であること、および平均年齢が1998年の34.73歳から2012年の48.59歳へ高齢化が進んでいることが特徴としてあげられる。

CVSが継続できたのはキーパーソンとしてのS氏の存在が指摘できる<sup>6)</sup>。ゼロからCVSの組織を立ち上げ、手探り状態で現在の組織にまで育てあげ、出向元である市の外郭団体に戻った後も、試合当日は必ずボランティア・リーダーが揃う前に会場に顔をみせ、ボランティアの受付を行っている。来場のボランティア一人ひとりに声をかけ、北海道フットボールクラブ（以下、HFC）の担当者を支えるS氏の存在が、CVSのメンバーに大きな安心感を与えている<sup>7)</sup>。

5) スポーツ白書2010による。

6) コンサドーレ札幌のボランティア組織の発足については、S氏は当時を振り返り、「コンサドーレ札幌が最初にボランティア・スタッフを採用したのはクラブ発足の翌年1997年のシーズンのことでした。当時はどんな仕事を依頼してよいかかわからず、わずか20名ほどの人数で、ファンクラブのブースのなかで、加入申し込みの受付支援業務からスタートしました。それが2006年には登録が340名、1回の試合に80～100人のボランティア・スタッフが活躍しています。1試合あたりの拘束時間は7～8時間にもかかわらず、高校生から70代までの幅広い世代が助け合いながら一緒に働く姿を見ると、一番成長したのはボランティア・スタッフかもしれないですね」と、しみじみと語った。

7) 北海道フットボールクラブとはコンサドーレ札幌の経営会社である。チーム名と運営会社異なるケースはほかにもあり、サガン鳥栖の運営会社はサガンドリームスである。

表2 コンサドーレ札幌のボランティア登録人数の推移

年度	ボランティア 登録人数	男	女	割合(%)		平均年齢
				男	女	
1998	41	26	15	63.4%	36.6%	34.73
1999	64	28	38	43.8%	59.4%	36.75
2000	100	42	58	42.0%	58.0%	37.83
2001	127	55	72	43.3%	56.7%	39.55
2002	175	69	107	39.4%	61.1%	40.33
2003	205	86	119	42.0%	58.0%	41.40
2004	268	119	149	44.4%	55.6%	41.02
2005	351	152	199	43.3%	56.7%	39.29
2006	341	145	196	42.5%	57.5%	40.42
2007	299	135	164	45.2%	54.8%	42.81
2008	314	149	165	47.5%	52.5%	44.86
2009	315	148	167	47.0%	53.0%	44.79
2010	292	139	153	47.6%	52.4%	45.59
2011	258	135	123	52.3%	47.7%	47.28
2012	245	126	119	51.4%	48.6%	48.59

出展：北海道フットボールクラブよりの提供資料から筆者作成

さらには、HFCとのコミュニケーションが挙げられる。これはボランティア業務終了後に簡単なアンケートに記入しその日の出来事や問題・疑問点を報告するような仕組みが出来上がっている。このアンケートは社長以下全社員に回覧され、該当部署の者が返事を記入し、その内容は月1回のボランティア通信に掲載しフィードバックを行っている。またシーズン開幕1ヶ月前には次のシーズンの試合運営についての打合せのためのボランティア・リーダー会議が開催される。この会議では、開幕にあわせ昨年の反省からはじめ本年度改善すべき点を中心に、今シーズンの運営の変更やマニュアルの変更について検討される。特に、マニュアルについては毎年新たに作成するのではなく、CVSの提案により変更した部分のみを差し替えるバインダー方式が採用されている。

#### 4. アンケート調査の分析

本論文のアンケートの目的はスポーツボランティア組織に所属する会員はどのような動機づけを持ってボランティア組織に参加しているかである。つまり組織の会員がスポーツボランティア組織に対してどのようなことを期待しているかを探ることである。

今回、CVSで、内閣府(2005)の調査と同じ内容の質問内容でアンケート調査を実施している。なお今回のアンケートは2012年8月から9月にかけて、CVSに属している人がアンケート用紙に記述してもらう形式で実施した。有効回答者数は124で、うち男性が59名、女性が65名である。

本章では、第1節でアンケート調査の回答者属性を概観し、第2節で調査結果を分析して考察を加える。

##### 4.1 CVSの回答者の属性

この節ではCVSで行ったアンケート調査の回答者がどのような人たちであ

るか考察する。

表3 CVSになってからの年数

	2012年
5年以下	35.1%
6～10年	24.0%
10年以上	40.9%

筆者作成

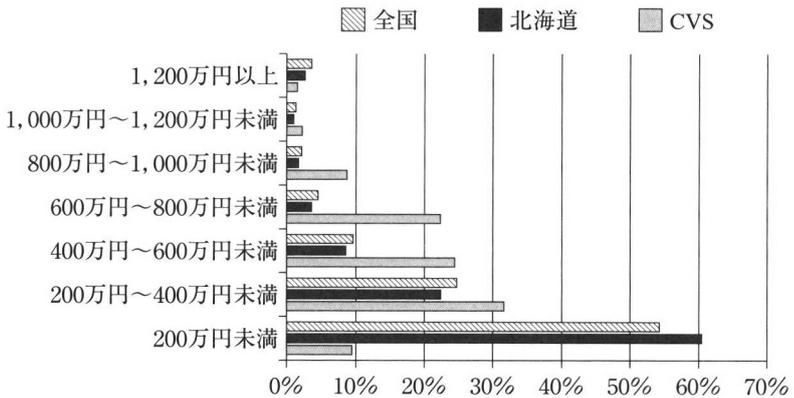
表4 アンケート回答者の年齢構成

	2012年調査(%)	
	男性	女性
10代	2.6%	3.8%
20代	7.9%	10.1%
30代	7.9%	12.7%
40代	14.5%	26.6%
50代	25.0%	17.7%
60代	34.2%	27.8%
70代	7.9%	1.3%
小計	100%	100%

筆者作成

表2のボランティア登録者の平均年齢をみると、2007年では42.81歳、2012年では48.59となっている。比較すると、平均年齢がおよそ6歳上昇していることがわかる。このことは組織のメンバーが固定化していることが予想される。このデータを検証するために、アンケート回答者にCVSになって何年か尋ねている。表3をみると、その分布は適度に散らばっており、ボランティアに所属しようとする人が毎年ある程度存在することが示されている。また10年以上が40.9%存在することはCVSがある程度成熟した組織となっている証拠である。また年齢構成を確認すると表4に示されるように回答者のうち60代以上は男性が42.1%、女性が29.1%とかなり高い比率となっている。札幌市の人口構成をみても、65歳以上の比率は高くなっているため、仕方がない側面はあるがアンケート結果には60代以上の意見・感想が大きく影響している可能性が高い。

図1 平均所得の分布



出展：『国税庁統計年報書』をもとに筆者作成

続いて、『国税庁統計年報書』の申告所得税の所得階級別人員とCVSに所属している方の所得階級別人員を比較する<sup>8)</sup>。北海道、全国の平均所得のデータは2011年の申告所得税のデータを用いている。今回のアンケートでは世帯所得を聞いているので、その部分を考慮して検討する必要がある。これをみるとCVSに所属している人は200万円～400万円未満の人々が最も多くいるが、400万円～600万円未満の人々、600万円～800万円未満の人々がそれぞれ20%以上所属している。つまり所得が高い人々が参加していると言えよう。

## 4.2 回帰分析

本節ではCVSに長く所属する要因について回帰分析している。質問項目は表5に掲載されている。質問項目から具体的には次のような推定式を考える。

$$\text{CVSに所属する期間} = \alpha + \beta_i \sum_{i=1}^n (\text{個人の生活満足度や不安感などの設問})$$

被説明変数としてCVSに所属する期間を、説明変数として内閣府(2005)を参考に個人の生活満足度や不安感などの設問を活用している。なおアンケートの質問項目は順序尺度に基づいているため、リッカートのシグマ法により順序尺度から間隔尺度に変更した<sup>9)</sup>。そして間隔尺度に変更した項目を利用して、OLSで回帰分析を行い、CVSに長く所属する動機づけ要因を探る。その際、男女に分けて分析を行っている。理由は他のスポーツボランティア組織よりも女性の比率が高いため、その要因を探るためである。その結果、男性と女性とでは結果が大きく異なることが示された。

---

8) なお国税庁のHPにて2011年のデータを取得することができる。(http://www.nta.go.jp/kohyo/tokei/kokuzeicho/tokei.htm)

9) アンケートなどで使われる尺度の一種であり、各種調査で一般的に用いられる。

表5 質問項目

Q 25. あなたは、現在のご自身の生活に満足していますか？当てはまるものを1つ選び○をしてください。

1. 非常に満足している
2. 満足している
3. やや不満足である
4. 不満足である
5. どちらともいえない

Q 26. あなたは、日常生活をおくるにあたって、次の問題や心配事がありますか？当てはまるものにそれぞれ1つずつ○をつけてください。

	質問内容	かなり心配である	少し心配である	どちらともいえない	あまり心配ではない	全く心配ではない
1	ご自分の健康・身体の状況	1	2	3	4	5
2	老後の自分の世話	1	2	3	4	5
3	ご家族の健康	1	2	3	4	5
4	家族(高齢者)の世話や介護	1	2	3	4	5
5	乳幼児期の子供の子育て	1	2	3	4	5
6	子や孫のしつけや教育	1	2	3	4	5
7	失業やリストラ	1	2	3	4	5
8	年収や家計	1	2	3	4	5
9	仕事上のストレス	1	2	3	4	5
10	定年後の人生設計	1	2	3	4	5
11	職探しや就職	1	2	3	4	5
12	家庭内での人間関係	1	2	3	4	5
13	近隣での人間関係	1	2	3	4	5
14	近隣の住環境・生活環境	1	2	3	4	5
15	地域での非行や犯罪	1	2	3	4	5

16	自分の将来	1	2	3	4	5
17	生活上の孤立	1	2	3	4	5
18	その他	1	2	3	4	5

Q 28. あなたの性別（当てはまる番号を1つ選び○をしてください）

男性	女性
----	----

Q 40. CVSをはじめて今年で何年目になりますか？（当てはまる番号を1つ選び○をしてください）

	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6～10年	10年以上
回答	1	2	3	4	5	6	7

Q 41. コンサドーレ札幌のサポーターになって今年で何年目になりますか？（当てはまる番号を1つ選び○をしてください）

	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6～10年	10～15年	15年以上
回答	1	2	3	4	5	6	7	8

内閣府(2005)のアンケート項目より一部抜粋

男性のケースにおいて予備分析として、被説明変数としてCVSに所属する期間を、説明変数として個人の生活満足度や不安感などの設問をすべて含めて回帰分析を行った（表6：分析①参照）。その後、AIC（赤池情報量規準）の数値が最も小さくなるように説明変数を選択した。この分析結果が表6の分析②である<sup>10)</sup>。

10) 多重共線性の疑いを確認するために、説明変数間の相関行列の目視を行った。その結果、説明変数間の重相関係数が大半のケースで0.4以下であった。そのため多重共線性の疑いはないと判断した。

表6 回帰分析の結果 (被説明変数:CVSに所属する年数)

	男性		女性	
	分析①	分析②	分析③	分析④
	AICを実施前	AICを実施後	AICを実施前	AICを実施後
定数項	-0.1843593** (0.0871689)	-0.14359* (0.07935)	0.13829 (0.10286)	0.10370 (0.08406)
自分の健康・身体の状況	0.325598*** (0.1070571)	0.32366*** (0.09691)	-0.01249 (0.13551)	
老後の自分の世話	-0.3638887** (0.1625874)	-0.41068*** (0.13616)	-0.23706* (0.13850)	-0.21340** (0.09313)
ご家族の健康	0.3034475** (0.1305672)	0.33398*** (0.12108)	0.01231 (0.17761)	
家族(高齢者)の世話や介護	-0.2816475* (0.1396378)	-0.22047* (0.12235)	0.08282 (0.16007)	
乳幼児期の子供の子育て	0.3466955* (0.1732556)	0.19837* (0.10615)	-0.08706 (0.16961)	-0.16427* (0.09573)
子や孫のしつけや教育	-0.2098583 (0.1838816)		-0.09032 (0.17932)	
失業・リストラ	-0.3540861** (0.1696836)	-0.30489** (0.13516)	-0.07456 (0.15011)	
年収や家計	0.1766681 (0.1881552)		0.07639 (0.13079)	
仕事上のストレス	-0.1141812 (0.1038639)	-0.15559 (0.09739)	0.11594 (0.12535)	0.18410* (0.09192)
定年後の人生設計	0.1482647 (0.1387646)	0.17258 (0.11905)	-0.05330 (0.12372)	
職探しや就職	0.4630551** (0.1858531)	0.45882*** (0.14362)	0.11245 (0.13302)	
家庭内での人間関係	0.1480507 (0.1425781)		0.03325 (0.13202)	
近隣での人間関係	-0.3379996** (0.1419575)	-0.26121** (0.10921)	-0.07604 (0.14323)	

近隣の住環境・生活環境	0.0171445 (0.1352910)		0.09794 (0.22060)	
地域での非行や犯罪	0.0008129 (0.1163688)		0.20871 (0.15363)	0.19406** (0.08806)
自分の将来	0.0246337 (0.166847)		0.13568 (0.16192)	
生活上の孤立	0.2447818 (0.1663925)	0.27154* (0.14271)	-0.06692 (0.1527)	
その他	-0.5772861*** (0.1713815)	-0.49583*** (0.14108)	-0.07662 (0.14308)	
現在の生活への満足	0.0947635 (0.0959012)		0.25618* (0.14611)	0.22161** (0.11204)
コンサドーレ札幌のサポーター	0.5105178*** (0.0959300)	0.52295*** (0.08873)	0.70089*** (0.10322)	0.71578*** (0.08944)
修正済み決定係数	0.6331	0.6544	0.4757	0.5578
DW 値	2.0813	2.2024	1.839	1.9627

注 1) アンケート期間：2012年 8月～9月 サンプル数：男性：59、女性：65

2) 推定値の下段の括弧は標準誤差、DW 値はダービン=ワトソン値である。

3) \*\*\* は 1%水準で有意、\*\* は 5%水準で有意、\* は 10%水準で有意

男性のケースの回帰分析結果について、表 6 の分析②を考察したところ、「自分の健康・身体の状態」「ご家族の健康」「乳幼児期の子供の子育て」「職探しや就職」の項目より、他者へ貢献するだけの余裕が生活上ある人が CVS への所属期間が長くなることが分かる。そして、「老後の自分の世話」「家族（高齢者）の世話や介護」「失業・リストラ」「近隣での人間関係」の項目より、自分の老後に対して不安を感じている人や会社での人間関係の喪失を心配している人、近隣の人間関係の構築がうまくいっていない人は所属期間が長くなっている。従って、CVS で新たに人間関係を構築していることが考えられる。また、「コンサドーレ札幌のサポーター」の項目よりサポーター期間が長けれ

ば、CVSへの所属期間が長くなる。従って、コンサドーレ札幌のチームへのサポーター（ファン）としての貢献意欲がCVSへ長く参加する要因になっている。

女性のケースでも男性のケースと同様に予備分析として、被説明変数としてCVSに所属する期間を、説明変数として個人の生活満足度や不安感などの設問をすべて含めて回帰分析を行った（表6：分析③参照）。その後、AICの数値が最も小さくなるように説明変数を選択した。この分析結果が表6の分析④である<sup>11)</sup>。

女性のケースの回帰分析結果について、表6の分析④を考察したところ、女性においても「老後の自分の世話」の項目より、自分の老後に心配している人が、CVSを通して新たな人間関係を作るために参加しているようである。しかし、男性と異なり、「仕事上のストレス」「現在の生活への満足度」の項目より、自身の生活や仕事に満足していて余裕がある人が参加しているようである。さらに、CVSの所属期間に影響を与える残りの項目は「コンサドーレ札幌のサポーター」の項目がCVSの所属期間に与える影響が特に大きい。従って、女性については、コンサドーレ札幌のサポーター（ファン）としての貢献意欲が、男性に比べてかなり強いCVSへの参加要因になっていると考えられる。

## 5. おわりに

本論文ではスポーツボランティア組織に参加するメンバーの動機づけ要因を検証するためCVSに着目し、アンケート調査・分析を行った。これらの結果を踏まえて、動機づけ維持のための方策提案をする。

11) 説明変数間の相関係数は0.3以下であり、多重共線性の疑いはないと判断した。また、誤差項の分散の均一性を確認するために、white検定を行ったところ、不均一性は確認されなかった。

CVSに所属する男性は、ボランティア組織への参加を通して関係欲求の充足を求めている。つまり触れ合いを求めている。従って、組織メンバーの触れ合いを高めるために、組織メンバーで食事会や飲み会等のインフォーマルな会合を定期的で開催する。これにより外発的動機づけを高める。また、内発的動機づけであるコンサドーレ札幌への貢献意欲からボランティア組織に参加している側面もある。コンサドーレ札幌やボランティア組織への貢献意欲を維持するために、CVSの成果のフィードバックを行う。さらにメンバー同士がお互いに働きぶりを労い合い、賞賛し合う雰囲気を醸成することで、メンバー個々の貢献感を実感する機会を増やすことで内発的動機づけを高める。

一方、CVSに所属する女性は、主に内発的動機づけであるコンサドーレ札幌への責任ある業務を任せる等、貢献意欲からボランティア組織に参加しているため、成果のフィードバックや貢献感を実感させることが特に重要である。

これらの方策を行うために、リーダーが組織メンバーに気を配る必要があり、S氏のようなキーパーソンの存在が欠かせない。

今後の課題としてあげられることは、CVSの若者定着率が低い要因を探ることである。今回のアンケート集計等を見ても同組織への参加者は中高年が中心である。本研究では中高年の参加への動機づけ要因を発見できたが、若者の動機づけ要因はわかっていない。この動機づけ要因を発見できれば、若者の定着率向上に生かせる。また、同組織への若者定着率向上は同組織の世代間のノウハウ継承による長期的存続のために必要と考えられる。

## 参考文献

- Adler, Alfred, 1964, "Problems of Neurosis, A Book of Case Histories", Harper Torchbooks  
(岸見一郎訳『人はなぜ神経症になるのか』、春秋社、2001年。)
- Alderfer, C. P., 1972, "Existence, Relatedness, and Growth", The Free Press.
- 伊多波良雄・横山勝彦・八木匡・伊吹勇亮編『スポーツの経済と政策』見洋書房、2011年。
- Hezberg, F., B. Mallsner and B. B. Snyderman, 1959, "The Motivation to Work", John Wiler & Sons.
- Maslow, A. H., 1954, "Motivation and Personality" 2nd ed., Harper & Row. (小口忠彦訳『人間性の心理学』、産業能率大学出版部、1971年。)
- 松野弘『地域社会形成の思想と論理』ミネルヴァ書房、2004年。
- 宮川公男・大守隆編『ソーシャル・キャピタル—現代経済社会のガバナンスの基礎—』東洋経済新報社、2004年。
- 内閣府経済社会総合研究所「コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピタルに関する研究調査報告書」2005年。
- 内閣府「高齢社会白書(2010年度版)」
- 野田俊作、『アドラー心理学：トーキングセミナー』、星雲社、1989年。
- Putman, Robert D, 1993, "Making Democracy Work" : Civic Traditions in Modern Italy, Princeton, NJ: Princeton University Press ) (河田潤一訳『哲学する民主主義 伝統と改革の市民的構造』、NTT出版、2001年。)
- Putman, Robert D, 2000, "Bowling Alone" : the collapse and Revival if American Community, New York: Simon and Schuste. (柴内康文訳『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生』、柏書房、2006年。)
- 笹川スポーツ財団『スポーツ白書2010』2001年。
- 総務省「過疎地域における基礎的データ分析と今後の振興方策に関する調査」2007年。
- 山口泰雄編『スポーツボランティアへの招待』世界思想社、2004年。

参考：Jリーグが例示する試合運営に関関係するボランティアの活動（網掛け部分がCVSの担当業務）

活動場面	活動内容
競技場の入場口および場外	チケットのもぎり、チケット販売、クラブサポーター受付業務、来賓受付業務、チケットのチェック、ビン類・缶類の紙コップへの移し替え、チラシ・パンフレット配布、アンケート調査業務、交通整理、場外警備
競技場内の業務	身体障害者の介助、座席案内、グッズ販売
競技場のグラウンドレベル	選手の表彰手伝い、マスコット（着ぐるみ）の演技と着付けの補助、ボールボーイの手配と指導、チアリーディング、負傷者の担架係、フラッグ入場・選手の誘導、試合前のアトラクション補助・ゴール設備、スコアボード（選手・審判）の架け替え業務
運営関係者の諸施設	マッチコミッショナー補助、設備の設営補助、試合記録、運営本部室補助、広報補助
その他	会場のDJ、マッチデープログラムの作成、マッチデープログラムの配布、会場清掃、スタンド警備、来賓接遇、試合開催時のイベント企画・準備・運営全般、競技進行、ファンクラブ加入受け付け

出展：高橋（山口編2004：124）を筆者改編

**Verification of motivation factors from belonging to sport  
volunteer organization  
– Canvass by using a questionnaire in sport volunteer  
of Consadole Sapporo –**

Mitsunori Matsuno · Kaoru Sano · Hiroaki Sakai

**ABSTRACT**

We're conducting a questionnaire survey and regression analyses to verify motivation factors from participating in sport volunteer of Consadole Sapporo. According to the result of regression analyses, we found out that men belonging to the sport volunteer organization make use of the organization as a place of personal contact. And we also dug up that the men want to contribute to Consadole Sapporo at their own initiative because they are Consadole Sapporo supporters. Meantime, we found out that women belonging to the sport volunteer organization strongly have willingness to serve Consadole Sapporo.

Keywords : sports; volunteer; Gemeinschaftsgefühl; motivation factors.

JEL Classification Numbers : I39; D19.